



このコーナーは県出身者で各界のトップとして活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

芸を地で行く

俳優 笠智衆



松竹大船撮影所の受付に「熊本県の者ですが、笠さんにお会いしたい」と告げると、「あ、笠さんはたまたま今まで、ここで待っていらっしやいました。芸文館に居られるはずです」時計を見た後、約束の時間を十分ほど過ぎていた。「これはしまつた」と思い芸文館に急いだ。笠さんは芸文館のなかの化粧室でメイキャップの最中であつた。来意を告げると「そうですか、そうですか」気さくな返事。鏡のなかの笠さんの顔が言う「こんどの役は外国で事業に失敗して帰国した老人ですよ」そして微笑している。笠さんは芸を「地」で行く俳優の一人である。

熊本県玉名郡天水町出身。明治三十七年五月三日生れ七十歳。玉名中学卒業後、竜谷大学、東洋大学に籍をおいたことがある。大正十四年松竹蒲田に入社。生家がお寺であるところから今でも僧籍にあるという。

現住所 鎌倉市岡本三二〇

小さな住職
私のうちは来照寺という浄土真宗のお寺でしたので、小学校に行く前からお経を習ってしまつてね、小学校時代にはもう衣を着て檀家をまわっていたものです。私、気が弱いものですからね、それが大変なやつです。それで、それです。何かとか逃げ出す方法はないものだろうか、と、そればかり考えていました。が、やっぱりとび出してしまいました。兄は中学にも行かず、「坊主はいやだ」と父と喧嘩をしましてね、台湾に行つたんです。それで親戚も門徒もみんな二番目の私を推薦したわけです。
竜谷大学に籍を置く

玉名中学を大正十二年に出まして、進学の問題が出て来たわけですが、これについては京都にある仏教の大学である竜谷大学以外はいけないうことになっていました。そこで入学試験前にあの西本願寺の横にある竜谷大学を見に行ったんですが、講堂の二階には畳が敷いてあつて如来さまが祀ってありましたね。聞くところによれば、その二階で衣を着てお勤めをしなければなりませんし、一週間には一回は本山である隣の西本願寺にお参りしなくてはならないということで、これはもう大変だと思つてしまいました。そのあと、西本願寺の前にある寺を私のおしが知っているので、その寺の離れ座敷を暫く借りていたわけです。と

ところがその住職から私のおじの方へ、「籍だけおいて私が学校に行かずにいる」という知らせが届けられましたので、学資を送ってもらえなくなりました。

そして四月もなれば過ぎると、各専門学校を落っこちた連中が京都の平安予備校に入校してきますが、私の友達も二人やって来ました。

私は学資がなくて困っていたものですから、その二人と一緒に暮らしておりましたが、「来年、予科の二年には入りませうから。」と言って、とうとう父を説き伏せてまた学資を送ってもらいました。そして一年たちましたが二年には入れるわけがないですよ。

研究生に合格

東京に東洋大学というのがあります。ここに入学したのが玉中卒業の翌年で大正十三年でした。あそこを出ると教師の資格がもらえるのですよね。東洋大は試験がなくてですね、学校の推薦だけでいいんです。カリキュラムにはインド哲学、倫理学などもありました。心おきなく通おうと思つてね一年間は月謝を納めて、しかし三日も行きませんでした。

東洋大学というのは男女共学でございました。ところが男女共学はいんですけど、年取った人が、先生だか生徒だかわからないような人が多勢おられたんで、ちっとも学生気分がしなかつたんですよ。そういうこともあつて、なまけて学校へ行かなかつたんですけど。

その時は、今玉名の市長をやつておられる橋本さんの兄弟や百メートルの選手であつた田尻裕之、それから玉名の横島付近から来ていた人たち五人ばかりで早稲田です。家一軒借りて自炊していたわけですね。

ある時、橋本さんが新聞を見て、「おい笠、あの蒲田撮影所で研究生の募集をやっているけど、これ受けてみないか。」

「ああ、役者なんて俺はダメだ」と言いましたが、

「役者はダメ、お前は坊主以外ならなんでもやると言っていたではないか。行って来い、行って来い。」というわけで、電車賃をもらつて蒲田に試験を受けに行きました。

そしたら、一番成績が良くて合格したんです。容貌も一番良かったらしいですね。

その時の試験官が英百合子さんでした。ね、後に随分、年取つてしまつてから、英さんと夫婦役になつて共演しましてですね。こうお礼を言つたんです。

「英さん、私に満点つけてくださつてもうもありがたうございました。」

「じゃあ、私は先見の明があつたわね。」と英さんは言つてくれました。

この松竹蒲田撮影所に入つたのが大正十四年の二月です。当時はまだ学資をもらつて東洋大学に通つていふことになつていました。

一時帰郷
ところが四月に父が死にましたんで

よ。それだものだから、私は寺へ戻つて住職をしなくてはなりません。しかし、私には住職の資格がないものですから、私の従兄弟で水俣のお寺の住職をやつていての手ずるで京都に行き裏口工作してもらつて住職の資格をとりました。その工作資金は、門徒の人たちにあれこれお世話になつたようですよ。

そういうわけで随分金かけましてね、私、住職になつたわけですよ。来照寺第十七代住職ですがね、私が。これは大正十四年のことです。今でも住職の資格はあります。

このほどですね、私が東海道線でこちらへ帰つて来る時じゃなかつたですかね。列車の中で次のようなことを聞かれたことがあります。

「笠さん」と言つて知らない人が来ましてね、「私、今本山へ行って来ました。が、笠智衆という住職の名札を見かけました。あれは同姓同名の同籍異人ですか、それともあなたが、あの住職ですか。」

住職の仕事は四月から十二月頃までやりましたかね。しかしですね、自分が責任もつて門徒をまわつたり、お経をあげたりしますとやっぱり蒲田のことがどうしても頭に浮かぶんですね。

一度なんか門徒の家の仏壇の前でお経をあげていたら、蒲田のことが思い出されてきてお経がすぐ終わつちやうたんです。おや終わったなとまた途中から始めて、何回も行つたり来たりするんです。

ところがお経の本を広げて私と一緒に読んでいる人がいらつしやいまして、私

がいいかげんなことをしゃべっているのを全部知つておられるんですね、ハハハ。そういうこともありました。

しかし、私わらあ門徒の中でも評判がよかつたらしいんです。だけど、どうしても俳優生活に戻りたかつたものから、台湾にいる兄に手紙を出して「私は東京へ行きますので、あなたが父の後継ぎとして住職をしなければなりません。」と伝えました。そして兄はすつとんで帰つて来て住職をしましたし、私は東京へ出て行つたわけです。その後兄は亡くなりました。

モノを言わない俳優

私が撮影所には入つた頃はまだトーキーではありませんで、全部サイレントでした。無声映画ですね。今から約五十年前です。つまり半世紀前のことですから、その頃の熊本は軍人に政治家がはばをきかせていました。ですから俳優などになつていたらもう、すぐ勘当ですよ。そういう時代ですね。また熊本では喋ること最大の恥とされてましたし、「男は三年に三口言えばいい」ということも言われていたもので、撮影所には入つても黙つて誰にもモノを言わないんです。随分モノを言わなかつたですね。そういうわけで勿論仕事はできないし、出る場合はその他大勢の通り抜けばかりで、ほかに運動会のお客さんだとか、駅の通行人だとか、通行人ばかりやりましたね。

五年ばかり経つた時でしたかね。岩田祐吉という偉い俳優さんから「笠くん、ちよつと来い。」と部屋に呼ばれまし